



龍華孤児院『入道乃要門』の翻刻と解説

著者	金見 倫吾
雑誌名	人間文化研究所年報
号	29
ページ	95-122
発行年	2018-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000971/

龍華孤児院『入道乃要門』の翻刻と解説

金見倫吾

はつめい

福岡における近代慈善事業の先駆とされる博多萬行寺の龍華孤児院は、一八九九（明治三二）年七月一日に運用が開始され、同年十一月二五日、同寺本堂で開院式が執り行われた。今回翻刻した『入道乃要門』（以下、『要門』）は、開院式当日『龍華孤児院生徒略歴』、孤児の写真、園児筆『あはれなる孤児』とともに招待客に配付された小冊子である。

『要門』は当時一五〇〇部発行されたことが知られていたが、鷺山智英氏による発見までその内容は不明であった。今回翻刻を行ったのは、通読に難のある仮名遣いや表記を改め、解説を付して発表することで、未だ課題が多く残されている龍華孤児院の施設史や仏教児童福祉思想史研究の進展の一助とするためである。

解説

・施設の概要

青少年非行の原因を生育上の経済・愛情の欠落に見いだし、東京と北海道に家庭学校を設立して独自の感化事業に生涯を捧げたキリスト者留岡幸助（一八六四―一九三四）は、龍華孤児院を次のように評した。

全寺は人の知る如く福岡県民の信用厚く当主も前代を承けて徳望衰へず殊に檀家多く従つて資金窮乏の憂なく仏教徒の事業中最良のものなるべし（『教学報知』一九〇一年九月二四日）

留岡が指摘するとおり、龍華孤児院の経済的基盤は強固であった。創設当初には四五十余名の委員を囑託して金品の寄付を依頼し、各鉄道各駅の待合室や著名な寺社仏閣に五百個以上の慈善箱が設置されている。萬行寺門信徒のみならず全国的な支援ネットワークによる潤沢な事業資金もあり、在籍児童数は以下のとおり漸増していった。

八名（一八九九年七月末）

十一名（同十一月）

三九名（一九〇〇年十一月）

五一名（〇一年四月）

六四名（同八月）

六七名（同九月）

八〇名前後（同十二月）

八五名（〇三年四月）

九三名（〇四年七月）

一二〇余名（同年末）

一九二〇（大正九）年頃には一一六名の児童が在籍していたことが確認でき、一九〇四年以降は在籍児童百名超の規模で推移したものとと思われる。施設はその後、一九二八（昭和三）年十月十八日に御大典記念として福岡市郊外の九鉄高宮付近の若久に移転。戦後は県宮の知的障害児施設・若久緑園として再出発した。

・資料について

▼出版の意図

執筆者の七里順之院長は冊子出版の目的を次のように記している。

只予輩の本願は。窮孤の貧兒を愛育することは。父母の子を念うより甚しとある仏心を体して、その幾分を實行せんことを期するのみ。（中略）今や幸に開院の式を挙行するに際し。その偶然に出るに非る所以を。仏経中に就て拮据し。之を編纂して大方諸君の瀏覽に供し。開院の記念となさんとす。（序文四頁）

順之は「仏陀の教は慈悲を以て本旨とす」るが故に、「慈悲の恩光に

浴するもの」は悲惨な状況に置かれた孤児を「袖に傍観」することは無いという。『要門』出版の動機は、仏教徒にとって不可避の課題として孤児救済を位置づけ、仏典を根拠としてその理解の正当性を証明し、さらには「請い願くは一臂の力を仮して。以て予輩の志望を達せしめ給わば。何の幸かこれに如かん」と語るごとく、事業の継続発展のための支援を得ることにあった。

▼内容

『要門』の構成は①序文、②開論業感門第一、③勸奨慈悲門第二、となっている。①では開院に至った経緯や冊子出版の意図に触れ、末尾に『優婆塞戒経』と『大丈夫論』を引いて、財を持ちながら他に施さない者は「貧窮」であること、他に施す者は涅槃と等しい喜楽を心に生じることを示す。

②では仏教の基本を三世の業感因果ととらえ、「仏教業感の理を確信せん人は。過去の非を悔い。現在の行を謹み。未来の居を安んずべき」であるとして説く。そして真宗においては来世の救いは弥陀の救済に托すため「毫も祈禱の心を用ゆることなく、「一生快適して只倫理道徳を重んじ。修身涉世のことに力を尽し各自の幸福を増進し。社会に報酬するの義務を尽くす之を二諦相資の妙教となす」と結論する。

③では「慈悲は仏教の本旨」とし、「四恩（父母・衆生・国王・三宝の恩）」に「奉答するの道は。只広く慈悲の美風を發揮して。世を救済せんことを企図するに在」という。その具体相として仏典・非仏典を涉獵しつつ、須達長者・聖徳太子・行基・鉄眼・月僊や歴代天

皇、北条時宗らによる福祉思想／実践を紹介する。そして「二諦相資を綱格とする吾真宗教徒に在ては。飽で仏教慈仁の本旨を發揮し。社会改良の事に力を尽し。国家平和の務に労を執る。宜く古高僧の芳躅に倣い。以て慈悲宏濟の目的を達し四恩に奉答するの本分を尽すべし」と主張する。

▼検討課題

『要門』には『無量寿経』・『観無量寿経』・『正信偈』・『破邪顕正鈔』などの真宗関連の典籍のほか、『梵網経』・『瑜伽師地論』・『優婆塞戒经』・『心地観经』・『法華经』など的大乘仏典から「天皇御製」の歌や政論書『文明一統記』まで、幅広い引用がなされている。これらの典籍の引用や理解の傾向を、龍華孤児院と同じく萬行寺で経営された龍華学校における教学内容との関わりに注意しながら分析することで、当時の教学が社会福祉事業の具体的展開にどれほど影響を及ぼしたのかが明らかとなる（『要門』への影響）。

また、龍華孤児院の開院以降の経営のなかで『要門』に示された理念がいかに反映され、どのように変遷していったかという視角からの分析も今後必要である（『要門』からの影響）。ただし、その規模にもかわらず、龍華孤児院の経営における児童処遇や理念等はほとんど不明である。「博多の龍華孤児院は七里和尚の紀念として創立したるものにて（中略）其進歩の完全の域に達すること、頗ぶる観るに足るものあり、其景況如何は其月報に依て之を知るを得べし」（『教学報知』一九〇一年八月八日）という当時の評論は、施設の運営実態を解

明する上で『龍華孤児院月報』が重要な史料となることを示唆する。一九一三（大正二）年十一月に第一二六号をもって『龍華慈善新報』と改題した『月報』は、現在、第五七号（一九〇四年七月十七日）と第七四号（一九〇六年一月十日）の二号が確認されるのみであり、『月報』のさらなる発見が俟たれる。

〔付記〕

『要門』発見者の鷲山氏には今回の資料翻刻の申出に快諾いただいた。また、解説文執筆にあたり、高石史人氏・中西直樹氏から関連資料や貴重な助言を賜った。ここに深く謝す。

なお、本稿は筑紫女学園大学特別研究助成「戦前期仏教保育事業の研究」をうけた成果である。

凡例

・旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
・くり返し記号（「、」「、」「、」「、」）は文字に置き換えた。

（かねみ りんご…人間文化研究所 客員研究員）

入道乃要門 完

龍華孤兒院藏版

(仏教図書出版株式会社印刷)

自序

唐詩に哀々たる父母我を生んで劬勞すとは。其父母鞠育の勞を叙したるものなりと。嗚呼その父母の子に於ける。万斛の愛情は傾瀉して更に惜む所なし。実に掌中の珍珠も畜ならざるなり。只その生育の速かならんことを希望するは。すべて人情の常なり。然るに不幸にして早く父母を喪い。親戚故旧の頼るべきなく。遂に路頭に迷いて可惜あたら天稟の材能を啓発するに由なく。一生を空く埋木と共に朽る。同一の人類同胞にしてその不幸なるを想像すれば。誰か一掬の熱涙を灑ぎて。救済の情

を動かさざらんや。又現にその恃怙ちちはははあり乍らも。或は一貧洗うが如く。麤食なお腹に充つること能わず。縊縷百結肩を現して。人理殆んど尽るが如きの觀あるもの。云何にしてかその子女教育の義務を果すことを得んや。人間果報の万差なるとはいえ。如此悲惨の境遇にあるもの。社会の下層到る処にあるを見る。是に於てか予輩先に同志の人々と相謀り。この不幸にして可憐なる窮孤の貧兒を收容し。その父母に代りて普通の教育をも授け。せめてその人格をも高め。自活の道をも得せしめなば。聊か 聖世の恩沢に報ゆるの一端ともなり。又

は仏陀の慈光に摂護せられたる身の本分たるべしとて。遂に龍華孤兒院を創め。政府の允准を得たりしに。四方の志士仁人相競て賛成助力の労を執られ。現今十一名の院兒を教養するに至れり。而して幸に金品等続々惠贈の榮に接して饑寒の虞おそれなく。みな熙々然として相樂み。家族的の親昵を全うすることを得る。偏に諸君義侠の厚志に依らずんばあらず。然るに世間の中には吾等の心事を諒せず。或は名誉を求め。或は利養を欲するに非ずやとの嫌疑を挟む人無きを期せざるべからず。それ仏陀の教は慈悲を以て本旨とす。苟くもこの慈悲

の恩光に浴するもの。豈この可憐不幸の惨境にあるものを袖に傍観して可ならんや。只予輩の本願は。窮孤の貧兒を愛育することは。父母の子を念うより甚しとある仏心を体して。その幾分を実行せんことを期するのみ。この挙決して偶然に出るに非ずして。全く 聖明の恩沢と仏陀の覆没とに由るものなれば。この挙にして成効せんか聊か涓滴の報恩に擬するに足らん。今や幸に開院の式を挙行するに際し。その偶然に出るに非る所以を。仏経中に就て拮据し。之を編纂して大方諸君の瀏覧に供し。開院の紀念となさんとす。只慙らくは予の

寡聞淺識なる。加之文章に習わざるを以て。極めてその叱正を仰ぐもの多かるべきを信ず。嗚呼今や人情浮誇を尚び。虚飾を競い。指に千金の繞指こゆびを穿ち。身に百金の衣服を纏い。足に十金の華履を履み。揚々として青樓の芳醺に酔い。纏頭擲美人の笑をかうの財あるも。この可憐の孤兒に向て一滴の涙なきものは。予輩の共に語らんと欲する所にあらず。只一片義侠の志士仁人の同情を得ば頗る足れり。請う願くは一臂の力を仮して。以て予輩の志望を達せしめ給わば。何の幸かこれに如かん。

明治三十二歳天長の佳節筆を龍華孤兒院の樓

上に閣す。

七里順之謹識

六

天下の人誰か一日三搏の麩を食せずして命全からざる者あらん。是故に応さに食の半を以て乞者に施すべし。極貧の人も誰か赤体にして衣服無き者あらん。若し衣服あらば一線の人に施す者なからんや。誰か貧窮にして身無き者あらん。如し身有らば他の福を作すを見て。応さに往て助て歡喜して厭うこと無かるべし。乃至若し財物の施すべきものなければ。他の施すを見已りて。心喜び信ぜずして福田を疑う。是を貧窮と名く。若し財宝多く自在無碍に良福田有らんに。内に信心無くし

七

て奉施すること能わざれば。亦貧窮と名く。是故に智者自ら観すべし。一搏の食を余して自ら食すること能わさるときは生じ。他に施すときは則ち死すとも猶応マさに施与すべし況や復た多をや。(優婆塞戒經)

若し慳心多き者は復た泥土と雖も金玉より重くす。若し悲心多き者は金玉を施すと雖も草木より軽くす。若し慳心多き者は財宝を喪失して心大に憂悩す。若し施を行する者は受る者をして喜悅せしめ。自らも亦喜悅す。説ひ美食あれども若し施与せずして食噉すれば以

て美とせず。設い悪食あれども。布施を行することを得て然して後に食すれば。心中歡悅して以て極て美なりとす。若し施を行い竟て余あれば自ら食す。善丈夫は心に喜樂を生ずること涅槃を得るが如し(大丈夫論)

慈有出利出檀特
四子經

- 一由慈心、愍諸物故無害他念、即刀不能傷也、
- 二由慈心趣饒益念、奉行衆召利濟群生、即一切惡害不能害也、
- 三由慈心、內無熱惱、外得清涼、即火不能燒也、
- 四由慈心內無貪愛、遠離欲流、即水不能沒也、
- 五由慈心常行利樂、普濟衆生、無冤親想故、瞋惡之人是則生喜也、

入道乃要門

北筑 七里順之編纂

開諭業感門第一

仏教は三世の業感因果の説を以て基礎となす。而して其因果に種々あり。一日の因果は。午前に勤勉したるの原因午後の休養の結果となり。一年の因果は春稼の勤勞によりて秋獲の利となり。一世の因果は前半生の事業老後赫々の功名となる。昨日はこれ過去。明日は未来。日に已に三世あれば年にも三世あり。三世の説疑うべからず。この間に善悪功過の因果錯綜

して栄辱勝敗の迹。歴然として誣ゆべからざるものあり。故にこの理を信ずるときは。遠くは三世を照徹し。近くは一世を洞観し。確然として立脚不動の地を得るに至らん。今は聊か業感因果の端緒を示すに過ぎず。読者その鹵莽を咎むることなく。進んで研究の階梯とせられんことを希望す。

仏教に種々の門あると雖も。畢竟は慈悲宏済を以て旨帰とし。二利の大益を成就するにあり。二利とは一には自利。近く之を暁諭せば教育の御勅語に。恭儉己を持し。学を修め。業を習い。以て智能を啓発し。徳器を成就すところあるものにて即ち自覚なり。二に利他とは博愛衆に及

ぼし公益を広め。世務を開く。即ち覚他の徳なり。苟もこの二徳を成ぜざるときは。社会公共の為に力を尽し。国家を益すること能わず。況んや仏教の宏済衆生の道を達することを得んや。二利円満は仏教究竟の目的にして。即ち大乘の極致なり。然れども遠きに之くに近きよりし。高きに登るに卑きよりす。故に仏教の初門たる小乘にては。教るに断悪修善の法。清心離欲の道を以てす。所謂の諸悪莫作。衆善奉行。自浄其意。是諸仏教。とは過去七仏の通誠し給う所なり。昔は唐の白楽天鳥窠禪師に如何なるかこれ仏教なりやと問しに。禪師答るに上の偈を以てす。楽天云く。これ三歳の童児も能く知る所な

りと。禪師云く。如何せん八十の老翁もこれを行い難し
 と。これ仏教は単に向上の議論を以て満足するものに
 あらず。必ず実行を俟つものなればなり。樂天これより
 心を傾けて仏乘に帰し。淨業を修め。唐の名臣となる。仏
 教実修の効豈欽慕すべきにあらずや。清心離欲の道に
 入る先ず業感因果の大道理を信ずるに始る。依て聊か
 その理を叙説し。未だ指を仏教に染めざるの人をして
 大牢の一饌に供せんとす。然るに元其所説緻密なれど
 も今記する所纔に其一班を出でず。其全豹を知らんと
 欲せば必ず多少の解学を俟つ。
 吾仏教にて六趣の昇沈を示し。(畜生之を六道ともいう)三世の

殃福を生ずる(過去、現在、)は必ず業に由る。業とは人の所
 作に名く。其所作に於て善惡の二つあり。故に果も亦淨
 穢の二つに分る。其業体は思を以て体とす。所作独り起
 らず。即ち意思の力に由るが故に。身口二業を起す。例せ
 ば合掌は其人信仰の意思を表白して柔軟の善心ある
 を知り。殺縛は其人慘忍の意思を表現して苛虐の悪心
 を懐くを察せらる。これ善惡の意思身に依て行ぜらる
 るを身業と名け。口に依て行ぜらるるを口業と名く。意
 業は審慮及び決定の思にして意識に依て行ぜらるる
 が故に意業と名く。審慮決定とは其未だ所作に出でざ
 るの前に審かに事の利害を考え慮りて後いよいよ此

事はなすべし彼事は為すまじ。と思惟決定するを云う。其善悪の標準を定るに。善とは安穩の業に名け。即ち其身に危険を招かず。能く可愛の果報を得て衆苦を済うが故に善となし。悪とは即ち不安穩の業に名け。即ち其身に危険の業にして非愛の果報を招き。其人を損惱せしむるを悪となす。何等をか安穩の業となす。身口意の三つに於て十善の業を持つときは。人天可愛の果を感じざるなり。十善とは身に於ける一に不殺生。一切の物命を殺さず。放生を行ずるを云う。二に不偷盜。他人の財物を窃取せず。布施の善を行ずるを云う。三に不邪淫。邪淫欲事を行ぜず。清淨の梵行を修するの三と。四に不妄語

(虚言を構えて他人を誑惑せず。実語の善を行ずるを云う)五に不両舌(両辺に向て是と説き非と談じ他人をして鬪諍せしめず。和合利益の善を行ずるを云う)六に不悪口(麁悪の言を放ち。他人を罵辱せず。柔和軟語を行ず)七に不綺語(裝飾華麗の語をなして人を惑わしめず。質直の正言を行ずるを云)の四と八に不貪欲(情欲塵境に貪着せず清淨の梵行を修するを云)九に不瞋恚(忿怒の心を生じて人を瞋恨せず。慈忍の善を行ずるを云う。)十に不邪見(偏邪の異見より非を執して是となさず。正信正見の善を行ずるを云う)之に反対するものを十悪業道と名く。この十悪業を行ずるものは。今世にては国家

の典刑ありて其罪を正し。後世墮獄の報を招く。豈恐れざるべけんや。経に云く(大無量)世有二常道。王法牢獄不二。肯畏瞋。為悪入罪。受其殃罰。求望解脱。難得免出。世間有此目前見事。寿終後世尤深尤劇。入其幽冥。転レ生受レ身。譬如王法痛苦極刑。故有二自然三塗無量苦惱。と。金口の勸誡深く仰信ずべし。今殺生を行ずるに就て之を詳述し。余を準知せしめん。其人先ず殺心を起し。身床より起ち。時に行きて手から家雞を捕え。其身重を秤り。其肥瘦を驗して後に縊殺す。之を殺生の加行と名け。正く其断命の刹那に根本業道を結ぶ。これ当果を得べきの因を植るなり。其後に剥截。烹食し其美饌を称讚する。之を殺生の後起と

なす。其殺後に於て悲愍の心を起し。其所行の惨酷なりしを悔るときは。この後起心なし。依て幾分か其悪業を軽減することあり。而して故思の業には(故思業とは今の法律にて云う謀殺の如きものにて。不故思は故殺に該当するに似たりし)必ずこの加行、根本、後起の三を具す。不故思は審慮決定して起すものにあらざれば。この三を欠ぐ。而してこの殺生を行ずるにも。亦其由て来る処あり。一には貪より生ず。二には瞋より生ず。三には愚痴より生ず。其貪より生ずるものは。或は其美饌を貪るが為にし。或は沽却して資財を得んことを欲するが為なり。或は瞋よりするものは心憤。恚する所あるより加

行を起すものは是なり。(仏世に比丘あり。珠師の門に乞食す。時に珠師王の爲に珠を磨く。珠を置いて食を取る。珠地に墮しかば。鷲来て之を呑む。珠師比丘に食を与えて後珠の在らざるを見。比丘の之を窃むかと誤想す。比丘鷲の殺されんことを傷みて。怪まるる儘其捶撃に任す。鷲流血の淋漓たるを見来て血を舐る。珠師怒を移して鷲を殺す。比丘是に於て其実を告と。これ加行を欠くと雖も瞋より来たるものなれば此に引例す)或は愚痴よりするものは。禽獸は本人間の食用に擬す。之を殺す何の罪かあらんといえる如き。又戯樂の爲に豚を放ち之を殺すの類なり。(今世往々如此の謬見を懐くものを見る。

警醒すべし。只後の三貪瞋。邪見は纔に現前すれば根本の業道を結ぶ。仏は之を三毒と名け。又は三縛とも宣う。生死流轉の淵源此に在るを以てなり。深く檢束すべし。而して其報を受けるの時節に四の差別あり。一に順現受法。今世に作したる善悪の報を今世に受る。これ其力最も強きに由る。第二に順生法受。今世に作したる善悪の報を来世に受く。第三に順後法受。今世に作したる善悪の報を第三生已後に受く。これその力最も劣れるに由るなり。これ業道は秤の如く。其重きもの先づ重きを以てなり。第四に不定業。三世の間に果を受ると。其時節に於て共に不定なるが故なり。而して禍福の報に転ずべき

ものと。転ずべからざるものとあり。其禳うべきの災禍は。これ転ずべきの業なり。是以て大善積んで災銷し。衆悪盈て福滅す。これ理の必然なるもの。信じて疑うべからず。經に云く(大無量)如是衆惡天神記識。頼三其前世頗作二福徳。小善扶接當護助之。今世為惡。福徳尽滅。諸善鬼神各共離之。身独空立無所復依と。何ぞ其言の痛切なる。それ衆生の行業純ならず。善惡互に用るが故に。果報に精麁あり。或は貴く。或は賤く。或は美。或は醜なり。其本行を了知せざるが故に。世人疑惑を致す。何となれば衛生勤勉の人は当さに長生を得て子孫繁榮すべし。而して却て身命天促し。家門凋落す。或は殺生慘忍の人は短命貧困

し。親族衰弊すべし。而して却て延年寿考宗族蔓延し。清廉の行応さに富足を招くべきに。還て貧苦に陥り。貪盜の人困迫すべくして。却て豊饒に樂む。吾が皇朝の古に在て菅丞相の名相にして終に流謫の憂あり。楠廷尉の忠臣にして。遂に殉難の厄を免れず。天道は善に福し。淫に禍すといえるも。其公明なる。世間明察の法官に及ばざるに似たり。何ぞ顛倒の甚きや。是に於てか識者をして天道は是か非かの歎声を発せしむるに至る。嗚呼法界の審理にして。反て善惡邪正の報酬を混乱して如此なる。豈理ならんや。これ因果の三世に錯綜し。業感の前後に倚伏するを知らざるの蛙見淺識に依らずばあ

らず。昔は人間の富貴貧賤を以て樹花の同く発て風に
随て散ずるに。其簾幌を払いて錦裯の上に墜るを以て
富貴に比し。或は籬墻に触れて糞溷の中に落るものを
以て。貧賤に況えたる人あり。(續齊范)これ誤の甚きものな
り。それ花の開くや。木精の生力保聚し蓓蕾と為る。これ
原因なり。時至て花爛熳として開敷し。果実を結ぶ。これ
結果なり。後風に随て散ず。其聚散は生死なり。花謝して
果を結び。果成て木生じ。転変已まず。之を人間の生死流
転止むことなきに譬うべし。それ善因善果を感じ。悪因
悪果を感じ。是以て人死し。形骸腐朽するも。其一生作る
所の業は必ず後世に牽引して止まず。經に云く。(大無量)

壽命終尽。諸悪所帰。自然迫促。共趣頓レ之。又其名籍記在二神
明一殃咎牽引当往趣向一罪報自然無從捨離一但得三前行入二於
火鑊一身心摧碎。精神苦痛。当斯之時一悔復何及。天道自然不
得一蹉跌一故有二自然三途無量苦惱一展二転其中一世々累劫無レ有一
出期一難レ得二解脱一痛不レ可言と晋道安法師云く。福成則天堂
自至。罪積則地獄斯臻ると。これ即ち必然の理り。芥爾も
疑べき所なし。然るに世間に於て善事を隱微の中に作
りて報を顕わなるに得る。之を隱徳の人と云いて欽慕
し乍ら。悪を顕わなるに作りて。報を幽に得るを妄誕な
りとするは。解すべからざるのことなり。古人云く。天堂
無くば則ち已ぬ。有らば則ち君子登らん。地獄無くば則

ち已ぬ。有らば則ち小人入らんと。然るに或は古来幾億万の人死後に其生所を帰り報ずるものなきを疑うものあれども。これ猶監獄の囚徒信を郷里に絶ち。雲上の高貴言を鄙夫に通ぜざると一般。業繫別にして幽冥路を隔つ。其相通ぜざるもの理なり。苟もこの仏教業感の理を確信せん人は。過去の非を悔い。現在の行を謹み。未来の居を安んずべし。人々如是なるときは。自然に三垢消除し罪障断滅し。清心離欲の梵行を成すべし。豈樂からずや昔は宋何尚之。文帝に仏教教化の効を奏して云く。百家の卿十人五戒を持たば。則ち十人淳謹ならん。千室の邑百人十善を修せば。百人和厚ならん。この風教を

伝えて寰宇に徧せば。編戸千万なるときは仁人百万ならん。それ能く一善を行えば則ち一惡を去る。一惡既に去らば一刑を息む。一刑家に息まば。則ち万刑国に息まん。則ち四海の内。刑措て用いざるに至らんと。嗚呼仏教の風化を裨補するの大なること此如。然れども業感因果の説は衆生業報の爽わざることを示し。怖畏を生ぜしめ。断悪修善せしめんと欲する。仏の無虚妄乃大悲の善巧に出る。苟も衆生其心源に達するときは。一念不生にして十界現ぜず。所謂る真如界内生仏の仮名を絶ち。平等慧中自他の形なし。般若心経に。是諸法は空相なり。又金剛経に諸相は相に非ずといえるもの。實に是なり。

然れども。若し一念纔に動くときは。万境波起り。念此に感ずるときは。境彼に応ず。譬えば。鏡の影を現するが如く。声の響を生ずるが如く。善悪の念好醜必ず応ず。是に於て法界森然として現ず。阿鼻依正処ニ于極聖之自心。毘廬身土不超二凡下之一念。と云うに至ては。これ向上の談なり。其妙致を究むる事豈容易ならんや。只吾真宗の教義に至ては来世の救済は純然弥陀願王之悲済に托し。至心信樂己を忘れ。毫も祈禱の心を用ゆることなし。宗祖大師の能発一念喜愛心不断煩惱得涅槃の妙境に逍遙し。一生悠悠々快適して只倫理道德を重んじ。修身涉世のことに力を尽し各自の幸福を増進し。社会に報酬す

るの義務を尽くす之を二諦相資の妙教となす。

司馬

忿怒如烈火、利欲如鋸鋒、終朝常威々、是名阿鼻獄、

溫公

顔回安陋巷、孟軻養浩然、富貴如浮雲、是名極樂園、

禪偈

孝道通神明、忠孝行蛮貊、積善來百祥、是名作因果、

六首

言為百世師、行為天下法、久々不可掩、是名不壞身、
仁人之安宅、義人之正路、行之誠且久、是名光明藏、
道意修一身、功德被万物、為賢為大聖、是名弘菩薩、

勸獎慈悲門第二

慈悲は仏教の本旨なり。三世の諸仏も之に由て自利を全うし。之に由て利他を成ず。孟子云く。怵惕惻隱は仁の端なりと。人誰かこの心なからん。然れどもこれを欲塵の中に茅塞す。故に見るべきものなし。苟も之

れを恢廓かいかくするときは。即ち慈悲宏濟ひこうさいの門もんに達たつすべし。これ仏教ぶつぎょうにて七聖財しちじょうざいを貯たくわえ。八福田はつふくでんを開ひらく所以ゆえんなり。今いまこれを説とくを以もつて主眼しゅがんとす。然しかるに劈頭はじめに四恩おんを掲かかげ來きたる。更さらに關係かんけいなきが如ごとくなるも。吾人ごじんの社会しゃかいに棲息せいそくする。四恩おんの覆護ふくごする所ところならざらんや。故ゆえに之これを奉答ほうとうするの道みちは。只ただ広く慈仁じじんの美風びふうを發揮はつぎして。世よを救濟きうさいせんことを希圖きとするに在あり。読者どくしゃ幸さいわいに之これを諒りようして無用むようの言げんとなすこと勿なかれ。

吾わが仏世ぶつせ尊心そんしん地觀じかん經きやうの中なかに於おいて四恩おんを説とき給たまう。云いわく。一いに父母ふぼの恩おん。父ちちに慈恩じおんあり。母ははに悲恩ひおんありと。蓋けだし父母長ふぼちやう養ようの恩おん。大だいにして喩たとうるに物ものなし。古歌こかに云いわく「匍はえば

立たて立たてば歩あゆめと子こを思おもう我身わがみにつもる老おいを忘わすれて」と。其その鞠育くくわの勞ろう知るべし。故ゆえに若もし子女しよそのおん其恩そのおんに背そむき順したがわざるときは。死しして即すなわち三惡趣さんあくしゆに墮だす。若もし父母ふぼに孝養こうようし。其志そのしに承順ていじゆんして違たがうことなくば。常つねに諸天しよてんの為ために擁よう護ごせられ。福樂ふくらく尽つきることなし。縦たとい能よく一日三時いちじつさんじに自身じしんの肉にくを割さきて父母ふぼを養やしなうも。未いまだ一日いちじつの恩おんを報むくうこと能あたはず。二にに衆生しゆじやうの恩おん。即すなわち無始むしより已來このかた一切衆生さいしゆじやう五道ごどうに輪轉りんてんし。多生たしやうの間あいだに於おいて互たがいに父母ふぼとなる。故ゆえに一切さいの男子なん子しは即すなわち是これ慈父じふなり。一切さいの女人にょにんは即すなわち是これ慈母じぼなり。是因縁このいんねんを以もつて諸しよの衆生しゆじやうの類るい亦また大恩だいおんあれば。現在げんざいの父ふ母ぼの如ごとく相敬愛あいぎやうあいすべしと。行基菩薩ぎやうきぼつさつは。この心こころを拡充かくじやうし

て。「山鳥のほどほどとなく声聞けば父かとぞ思い母か
 とぞ思う」と。所謂仁慈禽獸に及ぶものと云いつべし。
 三に国王の恩。それ正法を以て世を治め。能く衆生をし
 て悉く安楽ならしめ。若し王国の中。一人善を修るとき
 は。其所作の福。七分の中修善の人。自ら五分を得。国王は
 常に二分を得る。これ其恩庇に依て善を修ることを得
 るが故なり。若し悪人ありて逆心を生ずるときは。其人
 須臾の間に福德自ら消し。命終の後悪趣に墮して諸苦
 を受くべし。これ諸の衆生国王の恩を知らずして。悪逆
 を起すが故に。如是の報を受く。若し人ありて。善心を行
 い。敬て仁王を助け尊重すること仏の如くなれば。是人

現世安穩にして豊樂ならんと。況んや吾皇統の一系
 連綿として。万世に無窮なる。瀛環の中広しと雖も。卓絶
 して其比を見ず。加るに歴世の聖主其臣民を愛育し
 玉う。仁徳天皇の高台に登りて民屋炊烟の稀なるを
 望み給いて。其租税を蠲き。延喜の帝寒夜に御衣を脱
 して民の饑寒を察し給いしは。其芳躅古たりと雖も。
 列聖みなこの大御心を以て其大御心とし給わざるは
 なし。今其御製に係るもの一二を録し奉れば。後鳥羽
 天皇の御製に

夜をさむみねやの衾のさゆるにも
 わらやの風を思いこそすれ

後醍醐天皇

いろくれる秋のきぬたの音にこそ

夜寒のたみのころをも知れ

孝明天皇

ぬは玉の夜すから冬のさむきにも

つれて思うは国民のこと

此等を誦し奉れば。九重雲深き中にも其民の為に軫念を勞させ給うの辱さ。只感涙に咽ぶの外なし。況んや吾仏教は一千四百年。皇室の擁護を蒙り。この妙法を聞受することを得る。豈其皇徳を発揚する所以を思わざるべけんや。古徳云く。(破邪顕)一向専念のともがら。な

かんづくに。曠劫流転のあいだ。多少沈没のほど。善根薄少にして。いまだ火宅をいでざるところに。たまたま南浮の人身をうけて。さいわいに西方の仏教にあえり。このゆえに生々にうけし六道の生よりは。このたびの人身はもつともよろこばしく。世々にこうむりし国王の恩よりは。このところの皇恩ことにおもし。世間につけ。出世につけ。恩をあおぎ。徳をおおぐべしと。吾教徒は皇恩の重き尤も深く感戴すべし。四に三宝の恩。三宝とは即ち仏法僧なり。一切の衆生煩惱業障によりて苦海に沈淪し。生死無窮なり。然るに三宝世にありて船筏となり。能く四暴流(見、欲、有、無明)を截ちて彼岸に超昇せし

め給う。故に其恩報じ難しと。嗚呼吾等。朝夕この四恩に覆育せられて安穩の生活を営むもの。実に幸福と云いつべし。

伏して惟るに万世一系の神孫上に君臨し在まし。玄妙の仏教下に弘通して政化を裨補し。君徳と相俟ちて忠孝彝倫の精華を発揚し。勇氣淳樸の民徳を陶冶して。この東海の表に一大帝國を建設する所以のもの。其由て来る処遠し。吾仏教徒たるものは。如何せばこの四恩に奉答することを得べきや。固より吾真宗の如きは前にも述たる如く。俗諦の上にては倫理道徳を重んずるを宗憲とするものなれば。益々上は皇室の尊嚴を

擁護し奉り。下は仏教固有の慈仁の教義を宣伝拡張して飽まで社会の幸福を増進し。其平和を希図せざるべからず。これ即ち四恩に奉答する所以なるべし。

それ慈悲は仏教の綱格なり。三世の諸仏も之に由て生死を解脱し。之に由て衆生を濟度す。其徳たるや大なりと云うべし。經に云く。(壽經) 仏心者大慈悲是なりと。覺如上人(本願寺第三世宗主)この心を「あわれみを物に施すところより外に仏のすがたやはある」經意説き得て余蘊なしと云うべし。又慳吝の厭うべき。慈悲の尊むべきとを。善悪の報果に就て比較して説て云く。(壽經) 貧窮乞匄の飢寒に困苦し。其衣は形を蔽わず。其食趣かに命を支う

るの境遇に零落するものは。皆前世に徳本を植えず。財を積んで施さず。富有益々慳吝となり。但僥倖利を欲し。貪り求めて飽くことを知らず。如此して其人命終るときは。財宝消散し。或は徒らに他人の有となり。徳の恃むべきなく。善の恃むべきなし。是故に死して悪趣に墮し。この長苦を受け。罪畢りて出ることを得るも。人理殆んど尽る。(趣支命の狀態を云う)而して帝王の人中に尊貴なるは。皆宿世に徳を積むの致す所により。慈恵博く施し。仁愛兼ね済い。信を履み善を修め。違淨する所なし。是以て寿終り福応じて善道に昇ることを得。上天上に生じてこの福樂を享け。積善の余慶人と為りて王家に生れ。自

然に尊貴に。儀容端正にして衆に敬事せられ。妙衣珍膳心に随いて服御するは宿福の追う所。故に能く致レ此と。又余経に就て慈仁救済の事を左に鈔出せしに。梵網經には福田(田とは福を種るに堪るが故に名く若し人能く力を尽して此八種に)を説く中。第八病田とは。謂見二人有レ病。即当下念其苦楚。用心救療給中養湯藥上。則能獲レ福故名二病田。又貧窮を救済することとを説く。謂貧窮之人所須欠乏。飢寒逼切無レ所哀告。当レ起慈愍之心。隨其所須。皆周給レ之。是為二福田。また瑜伽師地論に四種の施如を説く中に。第一に有レ苦者。謂貧窮乞冑盲聾殘疾無レ依倚者。如是名。為二有苦。故宜レ施レ之といえり。又文明一統記の中には。慈悲を専らとし給うべき事と題し

て云く。慈じという文字もんじは拔苦はつくという心也こころなり。悲ひという文字もんじは与楽よろくという心也こころなり。仏ぶつの御心おんこころには衆生しゆじやうの為ために苦くを抜ぬて楽らくをあたえしとおぼしめすが慈悲じひの心也こころなり（輔行ほぎやうに云く。この「じひをめぐらし。慈悲あまねくほう。偏覆かいをおお」故ゆえに。能任運よくにんうん拔苦ぬき。自然じねんに与楽をあん矣げてん。外典げてんの書しよ運二慈悲一。偏覆二法界一。故ゆえに。能任運二拔苦一。自然二与楽一矣一。外典二の書一には是これを仁じんとなづけ侍り。仁じんというは人を愛あいする心也こころなり。言葉ことばこそかわり侍れ。心こころはただ慈悲じひの文字もんじに相違そういなきなり。すべて禽獸きんじゆうも手馴てなれてかうとなれば不便ふびんとおもわるるものなり。況いはんや人ひとたるものをば。おしなべて哀憐あいれんの心こころをたれさせ給たまわんが仁君じんくんの行ぎやうにて侍まるべしと。上じやう如此かくのごとく或あるは貧困ひんこんの救済きゆうさいすべきを説とき。或あるは苦惱くのおうの周給しゆうきやうすべきを勧すすむ。故ゆえに仏世ぶつせに在ありては。須達しゆたつ長者ちやうじやの積つんで能よく

散さんじ。乏とほしまを賑にぎわし。貧ひんを濟すくい。孤こを哀あわれみ。独どくを恤めぐむ。故ゆえに時ときの人ひと称しやうして給孤きやうこ独長どくちやう者と云いひしと伝つたう。而しかして仏教ぶつぎやうの吾わが皇朝こうちゆうに東漸とうぜんするに及びて。聖徳しやうとく太子たいしの四天王寺てんのうじを創はじめ給たまうや。置おくに悲田ひでん敬田きやうでんの二院にんを以もつてし。窮乏きゆうぼうを救すくひ給たまう。行基ぎやうき菩薩ぼさつの路險阻みちけんそに逢あて橋はしを架かし。路みちを修おさめ。其開墾そのかいこんすべきの地ちを指しては溝渠こうきやを穿うがち。堤防ていぼうを築きずき。灌漑かんがいに便べんせるも。八福田ふくでんちゆう中の事ことを实行じつこうしたるものなり。（八福八福に第一にに曠路くわうろ義井ぎへい第二にに橋梁きやうりやう建造きやうぞう第三にに平治へいぢ險隘けんがい等の事ことあり因よに記す宇治うぢの大橋たいきやう並ならに山崎やまざきの橋はしは行基ぎやうきの初はつめて架かする所ところなりと）又鎌倉またかまくらの極ごく楽らく寺良観じやうりやうかんの常施じやうせ悲田ひでんの二院にんを建たてて。多おほくの乞丐こつきやうを救すくひ。其四天王寺そのてんのうじを管かんするに及びては。悲田ひでん敬田きやうでんの二院にんを修おさめ。其得そのうる所ところの檀施だんせは即すなわち囚獄しゆうごくに散さんじ。寒素かんその者ものに逢あう

ては衣服いふくを与えあた。棄児きじを見ては之これを乳養にゅうようせしめ。凶歳きやうさいに逢あては粥かゆを煮にて飢うえを救すくい。時疫じえきあるときは病者びやうしやを集あつめて薬くすりを与あたう。其の二十年間ねんかんやしな養やしなう所ところ五万七千二百五十人にん。時人じじん呼よんで医王いおう如来にょらいと称しやうす。諸州しよしゅうに橋はしを架かすること一百八十所。道路どうろを修しゆすること七十一所。義井ぎせいを鑿うがつこと三十三所。乞丐こつぎやうに施ほせす所ところの布衣ふい三万三千領りやう。其他そのたは記きするに違いとまあらず。而しかして其身そのみ蚕衣さんいを着つくるを禁きんじ。弊衣へいい蔬食そしき之これに処しよして晏如あんじよたり。北条ほうじやう時宗ときむね亦また療病舍りやうびんしやを桑名くわなに作り。土州としゅう大忍だいにんの莊そうを寄付きよつして之これを助たすくるに至いたれり。後醍醐ごだいごてん天皇てん其行徳そのぎやうとくを追崇ついそして菩薩ぼさつの号ごうを賜たまうという。(委まくは師し僧そうて見るべし。就すなはち)又中世鉄眼またちゆうせいてつがんの一切経さいきやうを刊かんせんとするや。博ひろく

資財しざいを蒐あつむ。時偶々ときたま天下てんか大に饑うゆ。悉ことごとく之これを散さんじて貧民ひんみんに施せ与よす。幾いくばくもなく資財しざい再またび集あつまる。而しかして復またた凶歳きやうさいに逢あうて前まえの如ごとく散さんじ。三たび募つりて終ついに蔵経ぞうきやうを印刻いんこくせしことは人口じんこうに膾炙かいしやする所ところの佳話かわなり。或人あるひと之これを評ひやうして初はつめの二回にかいは活蔵経かつぞうきやうにして。後のちの一回にかいは死蔵経しぞうきやうなりといえり。蓋けだし初はつめ二回にかいの救済きうさいの功こう大なるを称しやうするなり。又伊勢いせの月僊画げつせんがを円山えんざん応挙おうきよに学まなびて一家いっかを成なす。其画そのえを請こうものあれば先まず価あひを論ろんじ。金かねを収おさむるに非あれば揮毫きぎやうせず。後益々のちますます其価そのあひを重おもくし。得うる所ところの財ざい巨万きよまんに至いたる。世人せいじん其その貪むさるの甚はなきを以もつて乞食こつじき月僊げつせんと云いう。後金のちきんを官かんに納おさめ。宮川みやがわの渡船賃とせんちんを除のぞき。又間之山またあいのやまの悪路あくろを修繕しゆぜんし。其余そのよは悉ことごと

く挙て窮民を賑恤せしという。如此古昔高僧の国家に
 対して開導補益の勞を執る。決して少々なりというべ
 からず。それ大乘の教る所は彼二乗の徒の世間に涉ら
 ざるとは同じからず。比丘沙門の法は生死已に尽き。梵
 行已に立ち。所作已に弁じ。只後有を受けざるを期す。我
 大乘菩薩の行は。二利の円満を希図するを以て世間を
 捨てず。家に在て事を行い。殖産興業のことより。延て感
 化慈善の務めの如きは。尤も其力を尽さざるべからず。
 これ所謂る法華經の資生產業皆順正法の金口の説に
 契当するものと云いつべし。況んや二諦相資を綱格と
 する吾真宗教徒に在ては。飽で仏教慈仁の本旨を發揮

し。社会改良の事に力を尽し。国家平和の務に勞を執る。
 宜く古高僧の芳躅に倣い。以て慈悲宏濟の目的を達し
 四恩に奉答するの本分を尽すべし。

貪財無布施(御製秘藏詮)

貪悞財宝、不起施心、既闕行檀、永墮貧苦、法華經云、見六道衆生、貧窮無

福慧

慈妙大悲心(同上)

仏位大慈得名為妙、拔苦無量名曰大悲、運此二心、普濟含識、經云、慈悲

憐愍遍一切、

明治卅二年十一月十七日印刷
同 年十一月二十日發行

龍華孤兒院藏版

編纂者

福岡県平民
七里順之
福岡市祇園町
四十七番地

発行者

兵庫県平民
清水精一郎
京都市油小路御前通上
ル仙具屋町第四番戸

印刷者

京都府平民
須磨兵衛
京都市五条通高倉
西入萬壽寺町十番戸

發行所

京都市油小路御前通上ル
興教書院

龍華孤兒院『入道乃要門』の翻刻と解説

金見倫吾

筑紫学園大学
人間文化研究所年報

第二十九号 二〇一八年